

事業完了報告書

- **助成事業名** 授産施設と顧客をつなげるマッチングサービスのモデル構築
- **団体名** 特定非営利活動法人まる コミュニケーション創造事業「maru lab.」
- **団体所在地** 福岡市南区野間 3-19-26
- **執筆者** 特定非営利活動法人まる 代表理事 樋口龍二
- **メールアドレス** higuchi@maruworks.org

● 団体紹介

1997年に無認可の作業所「工房まる」を開設。障害のある人たちが、人や社会と共有できる、時間・空間・仲間の「3つの『間』づくり」をコンセプトとし、施設内だけでなくさまざまな分野の方々とのつながりを構築し、障害のある人たちの可能性を広げていきました。

作業所を開設して10年目となる2007年に「NPO法人まる」を設立し、従来の「工房まる」の運営を施設運営事業とし、作業所現場で培った知識や経験を活かし、新たなコミュニケーション・コミュニティの創造を目指したコンテンツづくりやプログラム開発を行い、社会へ発信していくことを目的とした新たな事業「コミュニケーション創造事業」を創設。2010年より団体名を「maru lab.」（まるラボ）と名付ける。

● 助成事業概要

○ 講座タイトル

「障害のある人たちとの働き方を考える2日間」
～福祉をかえるアート化セミナー福岡2013～

○ 実施目的

2006年に施行された障害者自立支援法によって、障害福祉サービス事業所や地域活動支援センターなど障害のある人たちが通う施設の役割が変わりつつあり、障害のある人たちの工賃アップを図るために新たな仕事の展開などを考えている施設が全国的に増えてきています。

近年ではアート活動を取り入れる施設も多くなり、Tシャツやカレンダーなど施設のオリジナル商品として商品展開を進めている施設や、障害のある人たちの表現作品を企業などへ売り込み仕事を創出する中間支援団体も増えてきています。さらにここ1～2年では、行政主体で事業化している地域も増え、アート活動を仕事に展開する動きが全国的にも注目されはじめています。

しかし、安易に障がいのある人たちの表現活動が仕事につながる可能性が高いということではありませんし、表現活動以外でも仕事へつなげる可能性は多くあります。

そこで今回は、全国各地で先駆的に活動をされている方々を講師に招き、障害のある人たちのアート活動の可能性を広げるだけでなく、福祉関係者をはじめ行政関係者や教育関係者、障害のある人たちのサポートする人々を対象に「アート」「福祉」「仕事」の3つをキーワードにして、「誰のために」「何のために」といった、活動に取り組む以前の“自身の姿勢”を改めて考える講演／ワークショップを行っていただきます。

本事業では、「障害者支援」だけではなく、障害のある人たちと新しい関係を築き、“違いを認め合う”働き方を福岡(九州)に根付かせることを目的とし、まちの「福祉力」と「文化力」の向上を目指し、多様性を包括できる「まちづくり」の一環としても考えたいと思います。

○ 参加対象

福祉事業所／作業所職員、行政関係者、美術関係者、教育関係者、学生、アート活動に興味のある方など

○ 開催日時・場所

2013年3月23日(土)～24日(日)

1日目 23日(土) 11:00～16:30 九州大学西新プラザ

2日目 23日(日) 10:00～16:00 西新パレスホール



九州大学西新プラザ



西新パレスホール

○ プログラム

1日目 九州大学西新プラザ 3月23日[土] 10:00~16:30

- 10:00~11:00 受付(大会議室A・B<2階>)
- 11:00~11:15 主催者挨拶、オリエンテーション
- 11:15~12:15 **基調講演**
「アート活動を通じた障害のある人たちの働き方の変化」
播磨靖夫 財団法人たんぼぼの家 理事長(奈良県)
- 12:15~13:30 (休憩) 昼食は各自でお願いします。
- 13:30~15:15 **実践報告**
「<アート><福祉><仕事>それぞれの考え方」
「アートセンター画業の取り組みから」
上田祐嗣 有限会社ファクトリー 代表(高知県)
「ときめきプロジェクトが目指すもの」
藤野幸子 アリヤ出版/ときめきプロジェクトイベントディレクター(福岡県)
黒松祐紀 株式会社C.E.works チーフディレクター(福岡県)
「アート活動からの仕事復興」
田口ひろみ 山元町社会福祉協議会 工房地球村 施設長(宮城県)
武田和恵 財団法人たんぼぼの家 宮城スタッフ(宮城県)
- 15:25~16:15 **ディスカッション、質疑応答**
- 16:15~16:30 挨拶、2日目の説明など
<一時解散>
- 18:00~20:00 **交流会**
会場：御膳屋「奥離」 TEL:092-738-1858
福岡市中央区天神 2-11-3 ソラリアステージビル 6F
会費：4,000円

2日目 西新パレスホール 3月24日[日] 9:30~16:00

- 9:30~10:00 受付(ホールD<3階>)
- 10:00~12:15 **全体ワークショップ**(ホールA・B)
「自分たちの仕事をつくる」
西村佳哲 リビングワールド 代表/働き方研究家(東京都)
- 12:15~13:30 (休憩) 昼食は各自でお願いします。
- 13:00~13:30 受付(ホールA<3階>)
- 13:30~15:30 **選択プログラム**
「創作/表現活動を循環させるノウハウ」
A 「あるべき循環にむけたコミュニケーションデザイン」(ホールA)
定員40名 加藤未礼 おおきな木/コミュニケーションデザイナー(東京都)
B 「魅力を伝えるアウトプット~展示のノウハウ」(ホールE・F)
定員30名 中津川浩章 美術家/工房集アートディレクター(神奈川県)
C 「施設での創作/表現活動の環境づくり」(ホールD)
定員30名 榎本紗香 しょうぶ学園 デザイン室チーフ(鹿児島県)
桐葉朋子 やまなみ工房 アトリエころぼっくる主任(滋賀県)
- 15:30~16:00 クロージングディスカッション(ホールA)

○ 参加者内訳 (全86人)

(業種別)

福祉関係者：54人、行政関係者：11人、教育関係者：5人、学生：5人、美術関係者：4人、
中間支援関係者：3人、その他：4人

(講座別)

講演/実践報告(1日目)：52人
ワークショップ(2日目午前)：66人
分科会(2日目午後)：60人
<分科会A：18人、分科会B：12人、分科会C：30人>

(地域別)

福岡市内：36人、福岡県内：21人、佐賀県：7人、長崎県：7人、熊本県：3人、滋賀県：3人、兵庫県：3人、
大分県：1人、宮崎県：1人、鹿児島県：1人、山口県：1人、高知県：1人、岡山県：1人

● 事業報告

○ 1日目(3月23日)

基調講演「アート活動を通じた障害のある人たちの働き方の変化と可能性」



播磨 靖夫 (はりま やすお)

財団法人たんぼぼの家 理事長(奈良県)

新聞記者を経てフリージャーナリストに。障害のある人たちの生きる場「たんぼぼの家」づくりを市民運動として展開。アートと社会の新しい関係をつくる「エイブル・アート・ムーブメント(可能性の芸術運動)」を提唱。「ケアする人のケア」「アートミーツケア学会」など、ケアの文化の創造にも取り組んでいる。
平成21年度 芸術選奨 文部科学大臣賞(芸術振興部門)受賞。

財団法人たんぼぼの家

「アート」と「ケア」の視点から、さまざまな事業を実施している市民団体です。人々の創造的な関係性を創出し、多様な価値観を包摂した文化づくり・社会づくりをめざしています。
ソーシャル・インクルージョンをテーマに、アートの社会的意義や市民文化についてとしかける事業を展開しています。
国内外の団体とネットワーク型の文化運動を展開し、学会の運営(日本ボランティア学会、アートミーツケア学会)を担うなど、市民社会・市民文化に貢献しています。

講演のタイトルは「SMART時代のSMARTな働き方」。アート（表現）を媒体にして障害のある人たちと社会とつなぐ活動を約30年間の経験から培われた考えをわかりやすく丁寧にお話しいただき、参加者を引き込んでいただきました。

誰もがもっている優れた天分を開花させ、それを「仕事」にすることは、障害のある人たちのアート活動の大きな夢です。これまで余暇活動のひとつとしてみなされてきたアートが、近年、芸術的価値が認められるようになり、アートという働きがい、生きがいのある「仕事」の可能性に注目されるようになりました。それは低所得にあえぐ障害のある人たちの希望です。この社会的課題を「art×design」の手法でどう解決するのか、その戦略について事例を交えながら講演していただきました。

特に「アートはクエスチョン。デザインはソリューション。アートやデザインで社会課題を解決していく」という言葉は、障害のある人たちを取り巻く私たちが常に意識する大切な考え方ということを教えていただきました。



実践報告「<アート><福祉><仕事>それぞれの考え方」

障害のある人のためのアートセンター、「行政」「企業」「施設」が連携するプロジェクト、障害者の地域復興アートとコミュニティスペースについてそれぞれの取り組みについて事例を交えながら報告していただきました。

「立場や視点が違うことで“つなげる／伝える”幅も広がる」。多様な人々を包括するには多様な視点が必要ということを教えていただきました。

実践報告1「アートセンター画楽の取り組みから」



上田 祐嗣（うえた ゆうじ）

有限会社ファクトリー代表取締役（高知県）

「世の中に愉快を充満させたい」と愉快製造工場である「有限会社ファクトリー」を1990年に設立。デザインの役割をコミュニケーションのための通訳者と位置づけ、イベントや地域計画等を行う行政コンサルティングに携わる。障がいを持つ人や高齢者の本音を訊きたいとの思いから2000年にヘルパーステーション「てとて」を、2004年アートセンター「画楽」、認知症グループホーム「朋楽」、デイサービスセンター「咲楽」を開設。「田舎の暮らし人生コミュニティ、目に見えるものから見えないものまでデザインできないものはない」と活動中。

アートセンター画楽／有限会社ファクトリー

2004年、ファクトリーの理念を障がいのある人のためのアートセンターに応用して画楽が誕生。具体的な方針や行き先を持たないまま、「アートの本質とは？」「デザインが社会に対し果たす役割とは？」「障がいのある人が生きること？」などの様々な命題を画楽という孵卵器に投入。迷いながらの8年という長い年月を経て、ようやく見たことも聞いたこともない新しいカタチが生まれかけている。

元々、デザイン、行政コンサルタントが主流であった「（有）ファクトリー」に、アートセンター画楽が生まれて10年。障害のある人のためのアートセンターは、なぜ生まれたのか？制度が激変していく中でそれらの制度を自分たちの考える理想のありようはどう取り入れていったのか？

これまでの取り組みの紹介や10年を振り返っての気づき、これから先の10年そして30年後にアートセンター画楽が何を目指しているのかについてお話していただきました。

障害のある人たちの存在を認めることで、その人の表現を受信できる環境をつくるというお話は、単なるサービスを提供することだけでなく、「その人らしさ」が現れることによって関わる自分たちの存在や役割が見えてくるということを教えていただきました。

実践報告2「ときめきプロジェクトが目指すもの」



藤野 幸子（ふじの さちこ）

アリア出版／ときめきプロジェクトイベントディレクター（福岡県）

デザイン専門学校卒業後、広告代理店等でグラフィックデザイナーとして勤務。1987年より雑誌編集に携わり、コープ九州事業連合発行の生活情報誌「クリム」編集部に所属。編集長を経て2005年に独立。2007年福祉情報誌「アリア」創刊、アリア出版を立ち上げる。2011年より福岡市保健福祉局「ときめきプロジェクト」イベントディレクターとして障がい者施設商品の広報活動をしている。

アリア出版

2007年11月、障がい者の自立支援のため、福岡市近辺の障がい者施設の商品や活動を紹介する雑誌『アリア』の初刊を発行。障がい者施設商品の新たな価値を生み出すため、施設とのコラボで商品開発をし、誌上通販も試みている。広告や補助金等もいっさいナシで読者が支える本作りをし、自由なメディアを目指す。“小さくても一緒になれば何かができる”から「蟻の家＝蟻家（アリア）」と名付けた。年3回発行。現在18号まで発行。



黒松 祐紀 (くろまつ ゆうき)

株式会社C.E.works チーフディレクター (福岡県)

福岡大学卒業後、広告代理店勤務を経て、現在の(株)C.E.Worksに入社。チャンネルシティ博多など商業施設の広告・プロモーションの企画制作をメインに、行政の各イベント企画・運営など幅広く活動。2006年から福岡市の障がい者関連の事業に取組み、現在は「ときめきプロジェクト」のプランニング・運営を担当。福祉における行政・施設・企業の橋渡しを行っている。

株式会社C.E.Works

福岡地所グループが運営するチャンネルシティ博多を始めとした大型商業施設の広告販促・イベント企画を中心に、チャンネルシティ劇場の運営、行政イベント、街づくりのコンサルティング活動等、幅広い業務を行う。また、国内音楽アーティストや海外の大道芸・サーカスパフォーマー等との幅広いネットワークを持ち、様々なエンターテインメントコンテンツを活かした数多くのイベント実績あり。

福岡市が主催する「ときめきプロジェクト」では障害者施設の商品販路拡大や、障害のある人たちと市民との繋がり場の場をつくることを目的に「行政」「企業」「施設」が連携し、さまざまな取り組みを展開しています。施設商品の一般市場への販路拡大、企業とのコラボ商品開発からアートイベントまで、事例紹介を交えながら、どうやって周りの人を巻き込んでいくのか？魅力的にみせるためにはどんな工夫をすればよいか？施設はどう対応すべきか？など、野氏からは広報戦略の大切さやノウハウ、黒松氏からはイベント企画のノウハウなどを事例をもとに企画者側の視点からお話していただきました。

お二人ともアイデア出しや企画の専門ということで、特に施設関係者や行政関係者には斬新なお話が聴けたように思います。既成の「福祉」を越えたつながりができる可能性を感じることができました。

実践報告3「アート活動からの仕事復興」



田口 ひろみ (たぐち ひろみ)

山元町社会福祉協議会 工房地球村 施設長 (宮城県)

東北福祉大学社会福祉学部卒業。民間企業に就職後、1991年仙台市から自然豊かな山元町へ転居。3児の子育て・専業主婦を10年間経験。その後、子育てグループ代表や、山元町社協と山元町民俗歴史資料館の臨時職員を経て、1998年、山元町が設置した精神障害者通所授産施設山元町共同作業所(工房地球村)が開所し、指導員になる。2000年、施設が町から社協に運営委託となり、山元町社会福祉協議会職員となる。現在、工房地球村(山元町共同作業所・山元町障害者地域活動支援センター)施設長。精神保健福祉士。

山元町社会福祉協議会 工房地球村

工房地球村は山元町に一つしかない通所施設です。現在は、生活訓練と就労継続B型の多機能型サービス事業所、地域活動支援センター、相談支援事業所、療育支援事業所などがこの施設に集約され、町内の障害者のホットステーションなのです。東日本大震災で仕事を失い、大切な人たちも失った私たちは、これまでお世話になった地域の方々と町の復興をめざし、夢と希望をもっていろんなことにチャレンジ中です。



武田 和恵 (たけだ かずえ)

財団法人たんぼぼの家 宮城スタッフ (宮城県)

山形県山形市生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部映像コース卒業。学生の頃、たんぼぼの家にボランティアに行き、障害のある人のアートに触れ、「障害のある人に関わりたい!」という一心で山形市の福祉施設の援助員となる。商品制作、販売の担当を10年務めた後、福祉とアートに関わりたくて発起し、昨年4月から財団法人たんぼぼの家のスタッフとなった。東北出身ということを生かし、東日本復興「タイヨウプロジェクト」宮城スタッフとなり、宮城県山元町の工房地球村に常駐し、支援活動を行っている。

財団法人たんぼぼの家

[アート]と[ケア]の視点から、多彩なアートプロジェクトを実施している市民団体です。ソーシャル・インクルージョンをテーマに、アートの社会的意義や市民文化について問いかける事業を実施しています。国内外の団体とネットワーク型の文化運動を展開し、より公共性の高い仕事に取り組みます。

東日本大震災で、仕事の半分以上と大切な人達を亡くした工房地球村は、全国からの応援により、現在は「アートとコミュニティスペースづくりによる障害者の地域復興参加」をテーマに、町の特産であるいちごの復興を願い、メンバーが描きたいいちごの絵からの商品づくりと山元町を全国に発信する「いちごものがたり」プロジェクト、地域のコミュニティの再生を目指した「カフェ地球村」をオープンしました。町の復興に向けて障害のある人たちがどのようにチャレンジしているのか、さまざまな事例を報告していただきました。

工房地球村の実践は、震災で家族や住居、また施設での仕事が失われ、表現/創作活動から新たな仕事を生みだしていく過程には、働き方の大きな可能性を感じることができました。



ディスカッション、質疑応答

実践報告後は、基調講演いただいた播磨氏にコーディネーターをお願いし、テーマである「アート」「福祉」「仕事」の切り口で、報告いただいた3組の講師とディスカッションしていただきました。

まずは、講師の方々へ改めて一言お話しいただき、施設の商品展開は「プロダクト・アウトではなく、マーケット・インの考え方が大切」「困難から考えるのではなく、可能性から考える」ということを教えていただきました。

また、発表いただいた実践報告から異分野とのネットワークが大切という言葉も浮かび上がり、福祉の中だけでなく、行政や企業の文化も知り、目的を共有しながら進めていくことの大切さを学びました。

最後に参加者より「売れるものにしていくための工夫は?」「広報活動での心掛けは?」「行政などへもとめることは?」と3つの質問があり、「福祉の枠の中で考えるのではなく、アイダを見つめていくことが大切(メディエーション~仲介して解決していく)」という言葉には、参加者のみなさんが大きくうなずいていました。



交流会

1日目のセミナー修了後、会場を移し交流会を開催しました。講師11名、参加者23名、実行委員6名の40名の参加があり、一人ずつ1分間の挨拶をしていただき、今回のセミナー参加へ対する意気込みや、1日目を受講しての感想をいただきました。いろいろな地域からの参加者が分け隔てなく、自身の活動などで会話が弾みました。

また、今後の活動の情報を共有していくために、たくさんのお名刺が飛び交い、講師や参加者同士のネットワーク構築にもつながった交流会となりました。



○ 2日目 (3月24日)

全体ワークショップ「自分たちの仕事」をつくる」



西村 佳哲 (にしむら よしあき)

リビングワールド 代表/働き方研究者 (東京都)

1964年東京生まれ。リビングワールド代表、『自分の仕事をつくる』著者。武蔵野美術大学卒。つくる・書く・教える、三種類の仕事。建築分野を経て、30代以降はコミュニケーション・デザインの仕事を重ねる。多摩美術大学、京都工芸繊維大学 非常勤講師。最近、田瀬理夫というランドスケープデザイナーの話を軸にした本を執筆中。

有限会社 リビングワールド

コミュニケーション・デザインと、モノづくりの小さな事務所。最近よくワークショップをひらいています。

モノであれ体験であれ、人は誰かの仕事に触れるとき、つくり手の「あり方」や「存在」、別の言い方をすると、仕事に対する「姿勢」や「態度」を感じています。人が最も反応するのは、実はこの部分なのではないか? 自分の仕事を「社会と分かち合える仕事」にしていくとき大事なことはなんだろうか?

ワークショップではこのような問いを持ちながら、3人1組のグループをつくり、「仕事について今感じていること」をテーマに一人一人が自分の仕事と向き合い、それをグループのメンバーに伝え、その話を基に、他のメンバーが対話するというワークを繰り返しました。

「思考して考える言葉は理想のイメージであり、少し自分と距離がある。しかし、経験して生まれる言葉は実感であり、十分に人に伝わる」というお話は、社会で生きる人間として忘れてはならないコミュニケーションの基本であることを教えていただきました。





選択プログラム「創作／表現活動を循環させるノウハウ」

障害のある人たちの働き方のノウハウを学び、今までの講義を活かし、それを実践に結びつけるため、分科会A:「コミュニケーションデザイン」、分科会B:「作品のアウトプット」、分科会C:「創作／表現活動の環境づくり」と、3つ分科会を選択方式で開催しました。

分科会AとBは、ワークショップ形式、分科会Cは講義形式でおこない講師がお話いただいた事例をヒントに、身体や五感を刺激しながら、障害のある人たちと社会をつないでいくノウハウを学びました。

分科会A「あるべき循環にむけたコミュニケーションデザイン」



加藤 未礼 (かとう みれい)

おおきな木／コミュニケーションデザイナー (東京都)

バンタンキャリアスクールに通い、雑貨を学ぶ。10 数年の雑貨セレクトショップでの販売経験を生かし、「おおきな木」を 2008 年に開業。コンサルタント、ライター、グラフィックデザイナー、イラストレーターなどとの共同作業をプロジェクトごとにチームを結成し福祉施設の現場に入る。障がい者施設の商品アドバイス、ブランディング、パンフレット製作、ギャラリー・工房・カフェ・など空間デザイン、企業とのコーディネート他。

おおきな木

「授産品を商品に！福祉ショップをセレクトショップに！福祉喫茶をカフェに！バザーをマルシェに！作業所を工房に！」
福祉が社会の真ん中で、人を幸せにするモノやコトや場をプロデュースし、誰もが「自分らしく」いられる世の中をつくることに挑みます。since 2008

コミュニケーションデザインワークショップでは、グループのメンバー同士、「木の循環図」をツールに、視覚的に共有しながら、それぞれが持つ可能性を引き出しました。その後、一人一人が、何のために仕事をするのかについて振り返りながらも、仕事上で問題があった時、組織の中でどのように方向を見出せばよいか、問題をどのように整理し、未来を描いていけばよいかなど、多様な人たちと探っていく方法についてワークショップを通じて講義していただきました。



分科会B「魅力を伝えるアウトプット～展示のノウハウ」



中津川 浩章 (なかつがわひろあき)

美術家／工房集 アートディレクター (神奈川県)

美術家。国内外で個展やグループ展多数開催。全国でアウトサイダーアートについてのレクチャー、ワークショップ。震災後のトルコでライブペインティングやワークショップを実施。東日本大震災の被災地の福島、南相馬市などで、レクチャー、ワークショップを行う。展覧会の企画・ディレクションなど、「ワンダーアート」「エイブルアートアワード」選考委員を務め、障害者施設「工房集」のアートディレクター。2012年埼玉障害者アート展ディレクション。

「工房集」アートディレクター

埼玉県川口市にある「工房集」の表現作品をアウトプットしていくために、展示会のキュレーターや作品集のディレクションなどをおこなっている。

作品ができたことや展示したことで満足し、ただ壁に絵を掛けただけではその絵の魅力は見えません。ワークショップでは、「作品を観せるとはどのようなことなのか？」をグループで話し合い実際に展示を行いました。障害のある人たちの作品を考え語り感じることによって、よりの確で魅力的な展示のあり方見せ方ができるということと、テクニックだけで展示するのではなく、展示の目的を感じてもらえるような空間作りが大切ということ、実践を通じて学ぶ時間となりました。



分科会C「施設での創作／表現活動の環境づくり」



榎本 紗香 (えのもと さやか)

しょうぶ学園 デザイン室チーフ (鹿児島県)

1981年鹿児島県生まれ。2005年アメリカLakeland College アート学部をペインティング専攻で卒業。帰国後は、インターナショナルスクールに勤務しながら気ままなフリーランスとしてものづくりをする。2009年夏のある日、知人の紹介でしょうぶ学園を見学。一方的な運命を感じ、翌日履歴書を手に再来園。入社を果たす。現在は、工房しょうぶのデザイン室と造形班を担当。メンバーの行為=アートが生み出すエネルギーに日々魅せられ、それらをデザインすることで広がるコミュニケーションの可能性を探している。

社会福祉法人太陽会 しょうぶ学園「工房しょうぶ」

しょうぶ学園のものづくり集団、工房しょうぶ。障がいを持つメンバーは、大切に作る時間と空間、素材に寄り添いそこから生まれる真っ直ぐな気持ちをカタチにし、同じ工房でジョイントするスタッフは、メンバーが創り出すそのカタチを持つ自由で力強いメッセージとその個性を映す彼らの「行為」をデザインし、その美しさを社会に発信する。フィルターのない彼らのものづくりは、自分のスタイルを持つことの楽しさと、その重要性を示唆している。



桐葉 朋子 (いずりは ともこ)

やまなみ工房 アトリエころぼくくる主任 (滋賀県)

福祉分野の大学へ進み福祉施設へ就職。一つ目の職場では、やりがいを感じる事が出来ず9カ月で退職。将来について悩んでいた時、偶然やまなみ工房と出会う。以降5年に亘り「アトリエころぼくくる」班に所属し現在はアトリエの主任支援員。

社会福祉法人やまなみ福祉会 やまなみ工房

1986年に「やまなみ共同作業所」として甲南町に誕生。現在では55名の利用者が6つのグループに分かれて活動をしている。それぞれが一人一人の個性や気持ちに沿った活動を目指し、大切な人と一緒に笑ったり、時に悲しくなったり、様々な経験をする中、生きがいややりがいを感じられるとても楽しく居心地の良い場所である。

前半は、しょうぶ学園の榎本氏より、社会のマジョリティがつくる「ふつう」という物差しを捨てて覗く障害のある人たちの世界は、複雑で不思議ですが、とても正直で居心地が良い。ユニークなリズムで魂の声を発信する彼らのぶれない幸せ追求とそれが生み出す行為=アートについて「工房しょうぶ」のものづくりに対する考え方と共に紹介していただきました。

後半は、やまなみ工房の桐葉氏より、楽しい絵や凄いの粘土作品を次々に生み出す「やまなみ工房」に通うメンバーに対して、施設が大切にしている支援「みんなが楽しく笑顔で過ごせること」「見た事や行った事のない場所へ行ったり、何気ない日常にただ寄り添い微笑んだり」「作りたい、描きたい、伝えたいと言った気持ちが溢れ、毎日一人一人の得意なことなどを安心して自由に取り組める時間、そして空間をつくること」についてご紹介いただきました。



クロージングディスカッション

セミナー2日間を通して、まずは講師の方々に感想を述べていただき、参加者の今後の活動に活かしていけるための意見交換を行いました。

今回、福祉関係以外の分野の方々の参加も多く、参加者自身が働く分野で今後の活動にどのように活かしていくのか？また、どのようなつながりを構築していくのか？など、今回のセミナーでのひっかかりを最後に提言いただき、その言葉をみなさんと共有して2日間のセミナーは終了しました。



● 事業の成果

○ 参加者の感想（抜粋）

基調講演「アート活動を通じた障害のある人たちの働き方の変化と可能性」

満足：27人 やや満足：2人 ふつう：2人 やや不満：0人 不満：0人

- 教育関係の仕事に就き7年間経ちましたが、「アート」と「働く」という視点でのお話を初めて聴かせていただきました。ひたむきな表現こそが大きな特徴であるという言葉が心に残っています。(30代女性<教育>)
- 福祉の障害の世界にアートを取り入れることについて重要なお話を聴けて良かった。(30代男性<福祉>)
- アート...新しい価値を提案していく、できることに集中できる環境を目指さないといけないと思いました。遊びながら働く、楽しく動けるように提案していきたいと思います。(20代女性<福祉>)
- 播磨さんのお話は客観的で分かりやすい。授産施設という狭い世界・業界を飛び出すような広い視野が必要だと思う。(30代男性<行政>)
- 播磨さんの話は非常に分かりやすく、初めて足を踏み入れる自分にとって勇気をもらえ、今からの自分の役割がボンヤリではあるが見えてきたように思う。(50代男性<福祉>)
- 障害のある人たちの作り上げたモノの持ちうる可能性が感じられました。社会を変えていく活動力という点がとても気になりました。(20代男性<学生>)
- 恥ずかしながら企業と福祉施設をつなぐ中間支援組織の存在をはじめて知りました。きちんとアート作品として著作権や使用料などの手続きをすることが大切ですね。大切な視点、考え方など色々と学ばせていただきました。ありがとうございました。(30代女性<行政>)
- これまでアートの世界は知らなかったもので、アール・ブリュットと呼ばれることで枠ができてしまうこと、播磨さんの話は印象的だった。また、自分は「『わたし』の人間化が可能になる」という言葉で、もっと目の前にいる人たちが色んな人やものやことに触れられる機会を作っていきたいと感じた。(20代女性<福祉>)

実践報告「<アート><福祉><仕事>それぞれの考え方」

満足：28人 やや満足：3人 ふつう：0人 やや不満：0人 不満：0人

- 行政としてできることは何だろうと思いながら聞いてました。みなさんとの関係を築いていくこと。ネットワークをつくっておくこと。大事にしたいと思います。(30代男性<行政>)
- アート作品を販売するという経験がありませんでしたので、とても興味深かったです。職場で共に過ごしている生徒たちにもものを作るばかりでなく、消費者としての感覚を育てる必要があるのではないかと考えさせられました。(30代女性<教育>)
- 事例報告で少し物足りないと思ったところをディスカッションで深めることができたように思います。また工房地球村が社協により運営されていたということ、そのよさを生かしてされていること、新たな発見でした。(30代女性<行政>)
- それぞれの立場からのお話を聴かせていただき、とても不思議な時間となりました。福祉と企業という関係性のお話がとくに興味深く感じました。既存の価値体系を変化させていくことができるのかという点が気になります。(20代男性<学生>)

- 具体実践、他の方々が行っていることがとても気になり、どんな想いでやられているか知ることができました。共感部分が沢山ありました。自分達もこんなことができていると素敵だな。
(30代女性<福祉>)
- 広報活動の必要性、あと、失敗してもいいから自分たちでチャレンジしていくこと外部を受け入れる力、色んなヒントをいただけたように思う。(20代女性<福祉>)
- これまで福祉の中で完結してきたことがいかに多かったかを痛感させられました。特に離島地区というハンディキャップを抱えながら事業展開をしていかなければならないので、今回の講演では、そのヒントを教えてもらえたような気がします。(30代男性<福祉>)
- 授産商品、各事業所等(軽作業)の中での商品づくりにおける取り組みを見直したいと思いました。今までの考えはやはり正直、施設は一生懸命作ったものだから売れるだろうという思い上がりがとてもあり、デザイン性という発想がなく、アート活動を通して遊びながら仕事ができる人々を元気にしている売れるものづくりを目指してみたいと思いました。(40代女性<福祉>)



実践報告「<アート><福祉><仕事>それぞれの考え方」

満足：30人 やや満足：1人 ふつう：0人 やや不満：0人 不満：0人

- 腹を割って話していく中で生まれていくもの。作られていく形にもっと自分も話していきたい！と思いました。中々周りの理解を受けるのが難しい職場ですが、頑張っていきたいと思います。
(30代男性<福祉>)
- 働くことについてとても深く考えさせられた2時間でした。働くことは自己表現だ。社会と自分をつなぐことだと気付きました！(30代男性<行政>)
- 最初はただ色々な人と話して楽しいと思っていましたが、最後の最後に「あり方・存在」の大切さを実感し、感銘しました。(20代女性<福祉>)
- 書く、話すこと、コミュニケーションの大切さを改めて感じました。部下に伝えたいです。
(50代男性<福祉>)
- 自分を語る8分間はとてもあっという間だった。始めは言葉が出てこないんじゃないかと思ったけど、もやもやとか、これから仕事についてとか、聞いていただけてその後に「頑張っているね」と言ってもらった時には泣きそうになった。もやもやでも腹の底から話をする機会を作っていきたいなと感じた。
(20代女性<福祉>)
- ワークショップ面白かったです。島の絵がしばらく頭から離れないと思います。(30代女性<教育>)
- 沢山ある自分のことや、自分の想いを書き出し、聞いてもらい、また他の方々の想いや考えを聞くことができ、これからもこういう機会を沢山持ちたいと思いました。そして根底にある揺るぎないものを忘れずに仕事をしたいと思います。(30代女性<福祉>)
- 自分を語ってみて、そしてそれを聞いて、初めて他者からの話を正面から教わったように思う。
(50代男性<福祉>)
- 自分を振り返る良いチャンスでした。(50代女性<美術>)
- 自分の存在、在り方についてはじめて考えたような気がします。他者から自分の話について語ってもらうことで、自分に見えていなかった自分が見えました。(30代女性<教育>)
- 最初はただ色々な人と話して楽しいと思っていましたが、最後の最後に「あり方・存在」の大切さを実感し、感銘しました。(20代女性<福祉>)



**選択プログラム「創作／表現活動を循環させるノウハウ」
分科会A「あるべき循環にむけたコミュニケーションデザイン」**

満足：6人 やや満足：3人 ふつう：0人 やや不満：0人 不満：0人

- 同じ想いを共有することで、自分ができることを明確にすること、動く仲間をつくることって簡単だなと思いました。(20代女性<福祉>)
- 受講生同士で良く話し合うことができ、普段と違う話し合いができ、大変勉強になりました。(30代男性<福祉>)
- 内容が濃かったので少し時間が短かったのかな？と思いました。自分は2回目だったのですんなり入ることができたけど、もしかしたら他の方は短いと感じたかもしれません。でも短時間で色んなことを共有できて良かった。他のプログラムも受講したかったです。(30代男性<行政>)
- 複雑なルール(?)だったので、少し時間が足りないなと感じました。しかし、同じような想いの方がいて嬉しかったです。(20代女性<福祉>)

分科会B「魅力を伝えるアウトプット～展示のノウハウ」

満足：6人 やや満足：0人 ふつう：1人 やや不満：0人 不満：0人

- 自分の感覚を信じてとにかく何度も挑戦したいと思います！作品の良さを深く読み取る力をつけたいです。(30代女性<教育>)
- 多くの作品をコンセプトを絞り、より魅力的に見せる方法が難しかったです。(20代女性<美術>)
- 展示をして何を伝えたいか悩んで悩んで皆と活動していきたいと思いました。(20代男性<福祉>)
- 博物館での実習を控えているので、大変勉強になりました。今後、自分の中で学んだことを噛み砕いて力をつけていきたいと思います。(20代女性<学生>)
- 展示の技術だけでなく、心構えや立ち位置を学ぶことができとても為になる時間でした！(30代男性<福祉>)

分科会C「施設での創作／表現活動の環境づくり」

満足：16人 やや満足：1人 ふつう：1人 やや不満：0人 不満：0人

- 色々な実践を聞くことができ、面白くモチベーションが上がりました。もう少し環境のことなど詳しく聞きたかったです。(20代女性<福祉>)
- 「人」そのものについて、いろんな可能性を伸ばす教育のあり方を考えさせられました。(30代女性<行政>)
- 利用者だけでなく、スタッフも居心地の良い楽しい現場というのを自分たちも作っていきたいなと思いました。(20代女性<福祉>)
- アートをはじめるとあって「どうしたら良いか分からない」「皆の理解が得られない」色々悩んでましたが、今どんどんやってる所も、どこも悩みながらやっているんだと思いました。福祉とは違う世界から、このアートに関わろうかと悩んでいましたが、進路を再確認。本当にありがとうございました。(20代女性<福祉>)
- 福祉に関わって日が浅く、分からないことだらけの中、待つということの大切さを教えていただきました。利用者さんが笑顔でいれる、スタッフと笑顔でいれる、そんな中、日々過ごせるよう頑張っています。(40代女性<福祉>)



セミナー全体の感想

- 制作したものについて、いかに情報発信し、付加価値をつけていくか、という話をもっと伺いたいなと思いました。(30代女性<教育>)
- 企画してくださったNPO法人まるのスタッフの皆様、ありがとうございました。福祉の最前線に触れ、これからを変えていきたいと思った2日間でした。感謝しております。是非来年も伺いたいです。(50代女性<美術>)
- 2日目のみの参加となり大変残念でしたが、参加した分科会は面白くとても参考になりました。創造的な場作りに関しては、実際に言って肌で感じた方が良いのかな?とも感じたので行ってみようかと思えます。(30代男性<福祉>)
- 2日間アートと仕事を学びに参加したつもりが、人生設計(人生観)まで色々考えさせられた。本当にありがとうございました。(20代女性<福祉>)
- 人脈も広がり、新しい仲間が自分でできた気がします。このようなきっかけを設けていただきありがとうございました。(30代男性<福祉>)
- 現場で頑張っている人の活動を知るきっかけとなりました。もっとアンテナを張っていこうと思えます。(20代女性<美術>)
- 当法人では通所、入居の数種類のサービスを行っていますが、一人でも多くのスタッフに今回のようなセミナーを受講させたいと思いました。可能であれば出張セミナーという形もとっていただけたらうれしく思います。(30代男性<福祉>)
- スタディーツアーしてほしいです。(30代女性<行政>)
- 今回のような、今後利用者の方の生き甲斐につながる職員の働き方を継続して学びたいと思いました。(40代女性<福祉>)
- 現在の授産施設の状況は、障がい者の数さえ取り囲んでしまえば、作業の内容や施設の売上などに関係なく、税金で運営出できてしまう。こうした状況では、施設のスタッフはあえて努力しなくてもいいと考える人が多いと思う。(30代男性<行政>)
- 今、就職活動、将来のことなど様々な悩みを抱えながらこのセミナーに参加しましたが、皆さんがイキイキと自分の仕事のお話をされているのを聞いて私も素敵な社会人になりたいと思いましたし、人生のヒントみたいなものをもらったような気がする2日間でした。ありがとうございました。(20代女性<学生>)
- 実習、就職活動を控え、より具体的に障害者福祉とアートが結びついたことで生まれる可能性や、どんな取り組みをされているか、しることができ、とても勉強になりました。次回は、施設の職員になってまた違った視点で参加したい夢と目標ができました。ありがとうございました。(20代女性<学生>)
- 今回は自分の仕事や生活、周りの人との関係を見つめ直す良い機会となりました。次回もぜひ参加したいです。(40代男性<その他>)
- 初めて参加させていただきありがとうございました。セミナープログラムのみではなく、色々な方と知り合うことができたことが本当に素晴らしいことと思っています。(50代男性<福祉>)
- ぜひ、次回は利用者の方本人が講師をしていただいて、お話も聴きたいです。(30代男性<福祉>)
- 広い視野で観ることができるようになったかと思えます。次は園の他の職員も一緒に参加したいです。(30代女性<福祉>)
- 毎日は作業の繰り返しで、生きることは作業することだと思っています。そんな中、このようなセミナーに参加でき本当に良かったです。これから仕事をするにわくわくしてきました。(20代女性<学生>)
- 実際に働いている方々と触れ合う場。他施設と働いている方々同士が関わる場がワークショップなどを通して行えたら楽しそう。(20代女性<福祉>)
- 参加できてすごく良かったです。今後自分にできることで「福祉とアート」をつなげていくことに関わっていきたいと思いました。(30代女性<教育>)
- 本日はお世話になりました。とても勉強になりました。次回のイベントや勉強会等ありましたら是非参加させていただきたいです。(20代男性<学生>)
- 直接意見交換をしたかったのですが、昼のみの参加で叶いませんでした。また機会をつくって皆様とお話したいと考えています。よろしく願いいたします。(40代男性<行政>)
- 今回のような、今後利用者の方の生き甲斐につながる職員の働き方を継続して学びたいと思いました。(40代女性<福祉>)
- とても温かいセミナーで、学びと気付きが多く、沢山の方とつながれる場でした。企画運営ありがとうございました。(30代女性<福祉>)

○ 事業の成果と今後の展開

前回では「福祉」「と」「アート」をテーマにしたセミナーを行い、今回は「仕事」というキーワードを加え、講師陣もそのようなテーマでお話しいただける方々を招き開催いたしました。

また、参加者は福祉関係者が62%と半数以上でしたが、行政：13%、教育：6%、学生：6%、美術：5%、中間支援：4%と、他分野の方々にもご参加いただきました。

近年、福岡市では、行政が主体となった福祉施設商品のブランディング向上プロジェクトや企業などとのコラボレーション商品の展開／イベント開催などがさかんに行われ始めています。

そこで問題となっているところが、施設側の対外的な動きが難しいところです。古くから福祉施設の目的は、障害のある人たちの安全／安心を築いていくことでした。もちろん現在でもその目的はとても大切なのですが、今、障害のある人たちに必要なのは幸福を描けるような社会の構築だと思っております。

今回のセミナーで「仕事」をキーワードに加えたのは、そのようなことを福祉関係者始め、障害のある人たちを取り巻く他分野の方々とも考え合える場を構築したかったのも一つの理由です。

現状を知る限り、福祉施設内でのデザイン／販売管理／営業などの担当者を作ることはとうてい難しいことだと考えており、今回のセミナーで先駆的に実践を行っている講師、気持ちの良い働き方を提案する講師、また、同じ志を持つ参加者たちとの会話から、障害のある人たちはもとより、自身の可能性を少しでも広げてくれたらと考え企画いたしました。

1 日目終了後の交流会や対話するワークショップなど、講師をはじめ他の参加者との対話をする機会がたくさんありました。また、講義中でも感じたことや今後の活動のヒントとなるキーワードをギッシリとノートに書き込まれていました。数多くの名刺交換が行われ、参加者同士のネットワーク構築にもつながりました。

感想には“今後”という言葉がたくさん書かれています。私たち「maru lab.」としましても、このようなセミナーを企画した団体として、みなさんとの今後を発展させるべく、障害のある人たちの新たな仕事創出を始め、サポートする人たちの人材育成に努めていきたいと考えています。

また、今回の助成事業の一つにもなっている情報発信として、「maru lab.」のウェブサイトでも施設と企業とのコラボレーション商品の開発などの情報発信も行えるようにしたいと思っています。



障害のある人たちとの働き方を考える2日間

～福祉をかえる「アート化」セミナー福岡2013～



2006年に施行された障害者自立支援法によって、障害福祉サービス事業所や地域活動支援センターなど障害のある人たちが通う施設の役割が変わりつつあり、障害のある人たちの工賃アップを図るために新たな仕事の展開などを考えている施設が全国的に増えてきています。

近年では、アート活動を取り入れる施設も多くなり、Tシャツやカレンダーなど施設のオリジナル商品として商品展開を進めている施設や、障害のある人たちの表現作品を著作物として企業などへ売り込む仕事を創出する中間支援団体も増えてきています。さらにここ1～2年では、行政主体で事業化している地域も増え、アート活動を仕事に展開する動きが全国的にも注目されはじめています。

しかし、安易に障害のある人たちの表現活動が仕事につながる可能性が高いということではありませんし、表現活動以外でも仕事へつなげる可能性は多くあります。

そこで今回は、全国各地で先駆的に活動をされている方々を講師に招き、障害のある人たちのアート活動の可能性を広げるだけでなく、福祉関係者をはじめ行政関係者や教育関係者、障害のある人たちのサポートする人々を対象に「アート」「福祉」「仕事」の3つをキーワードにして、「誰のために」「何のために」といった、活動に取り組む以前の“自身の姿勢”を改めて考える講演／ワークショップを行います。

本セミナーでは、学びの場だけでなく、参加者同士の情報の共有化をすすめ、新しいネットワークを築きながら、障害のある人たちを取り巻く環境を整えていくと同時に、創作／表現活動を通してより人間らしく生きることのできる社会の構築を目指していきます。

創作／表現活動を通じた新しい福祉の創造に関心のあるみなさまので参加をお待ちしています。

2013年3月23日[土]・24日[日]

23日 九州大学西新プラザ
福岡市早良区西新 2-16-23

24日 西新パレスホール
福岡市早良区西新 2-10-1 3F

- 定員：各日 100名 ※要事前申込み・申込み先着順
- 参加費：10,000円（部分参加の場合／1日目：6,000円、2日目：ワークショップ3,000円、分科会3,000円）
- 対象：福祉事業所／作業所職員、行政関係者、美術関係者、教育関係者、学生、アート活動に興味のある方など

【主催】NPO法人まる 【協力】財団法人たんぽぽの家 【助成】公益財団法人日本財団

Supported by  日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION

障害のある人たちとの働き方を考える2日間

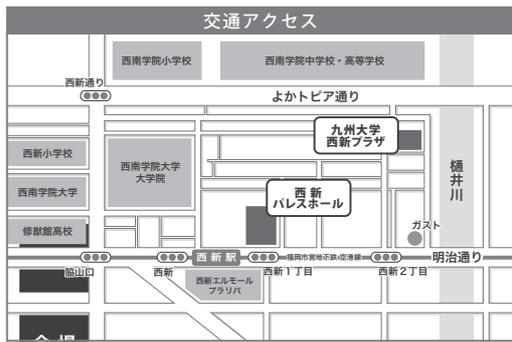
～福祉をかえる「アート化」セミナー福岡2013～

会期 2013年3月23日[土]・24日[日] 会場 23日 九州大学西新プラザ 24日 西新パレスホール

プログラム

1日目 九州大学西新プラザ 3月23日[土] 10:00～16:30

- 10:00～11:00 受付(大会議室A・B<2階>)
- 11:00～11:15 主催者挨拶、オリエンテーション
- 11:15～12:15 基調講演
「アート活動を通じた障害のある人たちの働き方の変化」
播磨晴夫 財団法人たんぼの家 理事長(奈良県)
- 12:15～13:30 (休憩) 昼食は各自でお願いします。
- 13:30～15:15 実践報告
「<アート><福祉><仕事>それぞれの考え方」
「アートセンター画案の取り組みから」
上田祐嗣 有限会社ファクトリー 代表(高知県)
- 「ときめきプロジェクトが目指すもの」
藤野幸子 アリヤ出版/ときめきプロジェクトイベントディレクター(福岡県)
黒松祐紀 株式会社C.E.works チーフディレクター(福岡県)
- 「アート活動からの仕事復興」
田口ひろみ 山元町社会福祉協議会 工房地球村 施設長(宮城県)
武田和恵 財団法人たんぼの家 宮城スタッフ(宮城県)
- 15:25～16:15 ディスカッション、質疑応答
- 16:15～16:30 挨拶、2日目の説明など
<一時解散>
- 18:00～20:00 交流会
会場：御膳屋「奥離」 TEL:092-738-1858
福岡市中央区天神 2-11-3 ソラリアステージビル 6F
会費：4,000円



九州大学西新プラザ
福岡市早良区西新2-16-23 TEL:092-831-8104
■福岡市地下鉄(空港線)
地下鉄「西新」駅下車、7番出口より徒歩10分
※ 駐車場がありませんので公共交通機関をご利用ください。

西新パレスホール
福岡市早良区西新2-10-1 3F TEL:092-841-2251
■福岡市地下鉄(空港線)
地下鉄「西新」駅下車、7番出口より徒歩1分
※ 地下に有料駐車場(30分100円<1,000円打ち切り>)がありますが、
駐車台数に限りがありますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

2日目 西新パレスホール 3月24日[日] 9:30～16:00

- 9:30～10:00 受付(ホールD<3階>)
- 10:00～12:15 全体ワークショップ(ホールA・B)
「自分たちの仕事をつくる」
西村佳哲 リビングワールド 代表/働き方研究者(東京都)
- 12:15～13:30 (休憩) 昼食は各自でお願いします。
- 13:00～13:30 受付(ホールA<3階>)
- 13:30～15:30 選択プログラム
「創作/表現活動を循環させるノウハウ」
- A「あるべき循環にむけたコミュニケーションデザイン」(ホールA)
加藤未礼 おおきな木/コミュニケーションデザイナー(東京都)
- B「魅力を伝えるアウトプット～展示のノウハウ」(ホールE・F)
中津川浩章 美術家/工房集アートディレクター(神奈川県)
- C「施設での創作/表現活動の環境づくり」(ホールD)
榎本紗香 しょうぶ学園 デザイン室チーフ(鹿児島県)
桐葉朋子 やまなみ工房 アトリエこぼるるの主任(滋賀県)
- 15:30～16:00 クロージングディスカッション(ホールA)

お申込み方法 (要事前申込み)

次の申し込み事項を添えてお申し込みください。定員各日100名(申込先着順)

1. お名前(ふりがな)
 2. ご所属・活動内容など ※勤務先、ボランティア活動先など。
 3. ご住所(□ご自宅/□勤務先等)
 4. 電話・FAX・Eメール
 5. このセミナーをお知りになったきっかけ
 6. 参加希望日程・区分
下記のa～dより参加日程を選んだうえで、区分をお知らせください。
a. 全プログラム(両日)参加:10,000円
b. 1日目のみ参加:6,000円
c. 2日目のみ参加:6,000円
d. 1日目と、2日目の □午前 / □午後 のみ参加:9,000円
e. 2日目の □午前 / □午後 のみ参加:3,000円
 7. 交流会(4,000円): □参加/□不参加
 8. 選択プログラム(2日目の午後の部に参加される方)
第1希望、第2希望(A～Cから選択)をお知らせください。
 9. お支払い方法
参加費(交流会費も含む)はお近くの金融期間よりお振り込みください。
※ お振込みは3月19日(火)までに、お願いいたします。
なお、振込手数料はご負担願います。
- <銀行振込>
福岡銀行 高宮支店 (普通)1587561
名義:特定非営利活動法人まる 代表理事 樋口龍二
- <郵便振込>
口座番号 01710-8-69084 加入者名:特定非営利活動法人まる

NPO法人まるのホームページ上にて「申し込みフォーム」をダウンロードできます。
<http://maruworks.org/topics/log/eid152.html>

※ やむを得ない事情により、プログラムの一部を変更させていただく場合があります。
※ お預かりした個人情報は、本セミナーの受付事務においてのみ使用させていただきます。

お問い合わせ・お申し込み先

maru lab.(NPO 法人まる)
〒815-0041 福岡市南区野間3-19-26
TEL:092-562-8684 FAX:092-562-8688
E-mail:marulab@maruworks.org (担当:樋口、船津丸、銅直)